

<研究ノート>

# 小学校の音楽教科における読譜力育成のための教育実践に関する研究 A Study of the Sight-Reading Training Process from the Note Reading and Symbol Recognition to the Music Reading in Music Subjects of Elementary School

嘉村 真衣

KAMURA Mai

筆者が公立の小学校で教鞭を執った時、楽譜を読むことができない児童が大勢いることに気がついた。学習指導要領では読譜学習について、3年生から指導するよう明記されている。高学年の児童に調査をしたところ、音符を読むことは譜読み時のみであり、その後は音符の上に書いたド・レ等の「音のメモ」を見ながら演奏していることが多いとわかった。本論文では読譜教育が始まる3年生を研究対象とし、読譜力育成のための取り組みとして考案、約半年間に渡って実施した「階名クイズ」とその結果の分析、実作品を使用した教育実践から、読譜教育の効果を検証し考察する。小学校での読譜教育をさらに強化することで、児童が多くの作品に取り組むことができ、音楽教育の全領域において、教育効果の向上に繋がることを期待する。

キーワード：小学校音楽教育、階名クイズ、読譜、ソルフェージュ

## 1. はじめに

筆者は、産休育休代替教諭として公立小学校において約1年間教鞭を執り、全学年の音楽を担当した。児童数が全学年で100名未満であったため、少人数指導ができた。長所は一人ひとりにみっちり細やかな指導ができたこと、短所はほとんどの学年が単学級のため、同学年の他学級と比較することがほとんどできない状態であったことである。

全学年の児童を指導する中、歌ったり演奏したりすることは得意としている児童が多い一方で、楽譜を読めない児童が多数いることを発見した。学習指導要領の解説<sup>(1)</sup>では「楽譜を見て演奏する技能」について、「身に付けることができるようにすることをねらいとしている。<sup>(2)</sup>」と、3年生以上で述べられている。しかし実際の児童の能力は、4年生は音楽表現に関してどの学年よりも意欲的であり、自ら考えたり意見を発表したりできる児童が多かったが、読譜に慣れておらず、譜読みの時間を丁寧にとる必要があった。5年生と6年生においても、イタリア音名が書かれている表を使用すれば知覚は可能であるが、読譜の習慣が少ないため、楽譜の読み方さえわからないという児童がいる等、「楽譜を見て演奏する技能」までは身に付いていないように感じた。

低学年は作品の長さも短く、身体表現の記憶で演奏表現が可能であったが、高学年は作品の長さや内容の濃さがより増すため、身体表現に加え「自ら楽譜を見る技能」を身に付ける指導が必要だと感じた。そこで「楽譜を見て演奏する技能」を向上させるための基礎学習として、3年生の授業が鍵になるのではないかと考えた。

本論文においては、3年生の高音部譜表によるハ長調の階名の知覚・感受に焦点を当て、1年間の指導による楽譜に対する姿勢の変化や、読譜力の向上、および作品への取り組み方の変化の結果に着目して、述べていく。

## 2. 研究対象学年・児童の様子

ここで対象とするのは、3年1組、全18名のクラスである。何事にも積極的に取り組み、協力してやり遂げることの素晴らしさを強く感じている児童が多い。

音楽に対しての姿勢は、いつも熱心で、授業中も発言量が多い。授業以外でもよく歌ったり、音楽に合わせて

体を動かしたりして、音楽を楽しんでいる児童が多い。これまでの音楽の授業で、歌ったり鍵盤ハーモニカを演奏してきたりしたが、楽譜を読んで演奏するのではなく、耳で聴いたものを歌ったり、指導者が動かす指を見て、鍵盤ハーモニカを演奏してきたりしたそうだ。学校外でピアノ等、音楽を学習している児童が4名おり、その児童が楽譜を読んで演奏している様子を見た別の児童が、楽譜が読めるだけで演奏できるのであれば、楽譜の読み方を知りたいと話していた。

本論文において使用する教科用図書(以下、教科書)は、教育芸術社の『小学生の音楽3』(平成26年3月検定済)である。

### 3. 楽譜を知覚・感受させる方法

授業では楽譜をより身近なものと感じさせるため、音高に合わせてハンドサインをつけて歌わせたり、体を動かしながら歌わせたりした。他にもリズムをわかりやすく言葉で伝えたり、音価を図で表したりしたが、音高・音価・リズムを同時に覚えていくことは大変そうであった。全員の目標として、「音高だけは自分たちで読めるようになりたい」ということであったため、音高に焦点を当てながら、楽譜を知覚・感受させる方法はないかと考えた。

## 4. 「階名クイズ」

### 4-1. 経緯

楽器の演奏や作品の鑑賞をするにあたり、「楽譜を読む」ということは、音楽を理解するための方法の一つである。実際に授業をしてみると前述の通り、高学年の児童は、楽譜を見て音符を読むこと、音高を判別することに極めて時間がかかる児童が多かった。児童に話を聞いたところ、リコーダーや楽器を演奏する際に、「楽譜を読む」ということはしているが、譜読みの時しか読んでいないことがわかった。それも各音符の上に「音のメモ」を書くために読むのであり、演奏に直接生かすためではない児童が多かった。そこで筆者は、楽譜にメモを書くためではなく、演奏のための「読譜教育」が必要だと考え、「楽譜を見る」だけで全員が読むことができれば、譜読みの速度が上がるのではないかと感じた。「読む」ことに慣れていけば、高学年になっても生かすことができ、より多くの作品を深く学んだり感じたりでき、演奏の技術や理解の幅が広がると考えたのである。

「読譜」を身近なものにしていくためには、日頃から楽譜に触れることが必要不可欠となるが、それに加え、学習を始める時が大切であると考えた。学習指導要領の解説にもある通り、中学年の児童は、楽譜に興味をもつ傾向が見られる<sup>(3)</sup>。

ピアジェ<sup>(4)</sup>によると、3年生頃の年代の児童期は、具体的操作期と呼ばれ、自己中心性から脱却することを主な特徴とし、これを脱中心化と呼ぶ。脱中心化が図られるために獲得できる資質が保存概念であり、目の前で物の配置や容器などの見かけが変化しても、物理量に変化がないことがわかるようになる<sup>(5)</sup>。

つまり四分音符や八分音符等、音符の種類に惑わされずに音高を認知できるようになる時期である。実際に授業をしていると、「楽譜ってどのように読むの?」「楽譜があれば、CDがなくても歌ったり演奏したりすることができるんだね。読んでみたいな。」という声が年度当初からかなり聞こえた。この意欲を是非伸ばしたいと思った筆者は、毎授業で楽譜を読む活動ができないかと考えた。3年生はソプラノリコーダー(以下、リコーダー)の学習を始める時期<sup>(6)</sup>で、器楽の演奏が増え、それに伴い楽譜を読む機会も増えるため、「階名クイズ」を実施することで、音高を判断できる力を成長させられるのではないかと思索した。そこで筆者はハ長調の音階を使用した「階名クイズ」を考案した。なお本論文ではドイツ音名の表記法を採用する。

#### 4-2. 実施方法

準備物は、「階名クイズ解答用紙」・「階名カード」の2つのみである。「階名クイズ解答用紙」はA4のプリントに3回分印刷（資料1）し、3回目に回収をしていた。階名カードは市販のものもあるが、筆者は自作したカードを使用していた。

「階名クイズ（以下、クイズ）」実施前の授業において、楽譜の読み方について学習した。楽譜には五線と呼ばれる5本の線があり、下は低い音、上は高い音を示すこと。書かれた音符や休符によって音価が変わり、リズムが決まること。先に述べた音の高さは、楽譜のはじめに書かれる記号により、基準となる高さが変わること。その中にト音記号という記号があり、今年ト音記号を使った楽譜に慣れること。ト音記号を書き始める位置が $g^1$ 音となること、 $g^1$ 音を基準として、下に行くほど低い音になり、上にいけば高い音になることを伝えた。音階や調性については未学習であるため、ハ長調で説明することを前提とする。例として「ドレミで歌おう」（資料2）を演奏し、知覚させた。歌ったり鍵盤ハーモニカで演奏したりして音高を実感した後、教科書の楽譜にはドレミ等階名が書かれているが、これからリコーダーも練習していくにつれて、楽譜に階名が書かれていることが少なくなることを、教科書を見ながら確認し、次の授業からクイズをやりながら、楽譜を読む力をつけていこうと導いた。

【資料1】「階名クイズ」解答用紙

第1回の実施時に、これから毎授業開始の挨拶後に実施することを児童に伝え、ルーティーンとした。ルーティーンにすることで、児童が自らお互いに声かけをしてクイズをやる空気を作り出し、授業も時間通りに始められた。開始の挨拶後すぐに筆記用具と解答用紙を出させて、クイズを始めた。上記の通り、3回のうち2回は児童が自ら解答用紙を持ってくるようになっていたからである。筆者がプリントを配布する日は、筆記用具の用意を終えるまでにプリントが行き渡るようにしていた。

【資料2】「ドレミで歌おう」<sup>(7)</sup>

問題数は、毎回5問である。1つの音符を5～15秒程度見せ、全て見せ終わった後に、1つずつ音符を見せながら解答を伝えた。採点は児童に任せた。少人数ということで、採点している様子を観察することができた。音符を見せる時間に10秒ほど差があることは、クイズを始めた当初と、慣れてきてからは見せる時間が異なっているためである。採点後お互いの点数を言ったり難しかった理由を話したりし、その後すぐにクイズを回収、または収納させて通常授業を行なった。始めた当初は、クイズに慣れていないことや音符を見せる時間が長かったことから、4～5分ほど要していたが、慣れてきてからは2～3分以内で実施していた。

#### 4-3. 解答方法

解答は「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」というようにカタカナで書かせた。c<sup>1</sup>音～h<sup>1</sup>音についてはこの表記で問題なかったが、c<sup>2</sup>音とd<sup>2</sup>音はc<sup>1</sup>音とd<sup>1</sup>音と区別させるため、教科書で表記されていた「下・レ」を用いて解答させた。各回の解答は【参照資料1】を参照。

#### 4-4. 各回の内容と日程

クイズは、2017年5月11日に第1回を実施し、同年12月11日の第29回まで実施した。そのうち2回「階名クイズスペシャル」を実施した。内容は後述する。3学期は卒業式の練習で実施時間の確保が困難だったことと、取り組む作品数が多く楽譜を読む機会が増えることから、実践で読譜力を伸ばそうと思い実施しなかった。

実施した全29回の内容は、大きく3つの出題範囲に分類される。第1回から第4回まではc<sup>1</sup>音からg<sup>1</sup>音、第5回から第12回まではc<sup>1</sup>音からc<sup>2</sup>音、そして第13回から第29回まではc<sup>1</sup>音からd<sup>2</sup>音である。この出題範囲は、3年生で習得させるリコーダーの運指と同じである。実施した日程は以下の通り（資料3）である。3年生の授業は基本的には週2回実施であるが、学校行事や授業回数調整のため週1回実施の週もある。参考として学校行事（資料4）とクイズ実施期間内の音楽のテストの日程（資料5）を掲載する。

##### 【資料3】実施日程と出題範囲

###### ① c<sup>1</sup>音からg<sup>1</sup>音

第1回	5/11
第2回	5/15
第3回	5/25
第4回	5/29

###### ② c<sup>1</sup>音からc<sup>2</sup>音

第5回	6/1
第6回	6/5
第7回	6/8
第8回	6/15
第9回	6/19
第10回	6/22
第11回	6/26
第12回	6/29

###### ③ c<sup>1</sup>音からd<sup>2</sup>音

第13回	7/3	第21回	10/5
第14回	7/4	第22回	10/12
第15回	9/4	第23回	10/16
第16回	9/7	第24回	10/31
第17回	9/11	第25回	11/2
第18回	9/21	第26回	11/6
第19回	9/25	第27回	11/27
第20回	9/28	第28回	12/7
		第29回	12/11

##### 【資料4】5月11日～12月11日の学校行事

6/12	音楽鑑賞教室 運営委員として出張
7/21～8/31	夏季休業（夏休み）
9/30	運動会
11/10, 11	展覧会

##### 【資料5】5月11日～12月11日の音楽のテスト

6/15	歌テスト「茶つみ <sup>(8)</sup> 」
6/29	リコーダーテスト「小さな花 <sup>(9)</sup> 」
11/14	歌テスト「ふじ山 <sup>(10)</sup> 」
11/21	リコーダーテスト「山のポルカ <sup>(11)</sup> 」

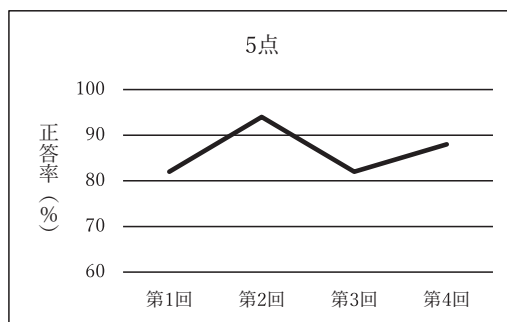
#### 4-5. 各回正答率の変遷

全29回にわたり実施したクイズの、それぞれの正答率について見ていく。前述した3つの出題範囲に分類し、正答した人数の割合で見ていくこととする。

##### ① 第1回～第4回（資料6）

出題範囲は「c<sup>1</sup>音～g<sup>1</sup>音」である。この期間は、まずクイズに慣れるということが最大の目標であった。ここでどれだけ慣れるかにより、今後続けていくことが可能かどうか、児童のやる気がどこまで続くかが決まると思ったからである。楽譜を読んだことがない児童も多数いるため、読めるようになることで、音楽を聴かなくても演奏することができるようになる、どのような音楽か想像することができるようになる等、読めた後の利点を述べながら進めていった。

##### 【資料6】第1回～第4回 正答率の変遷

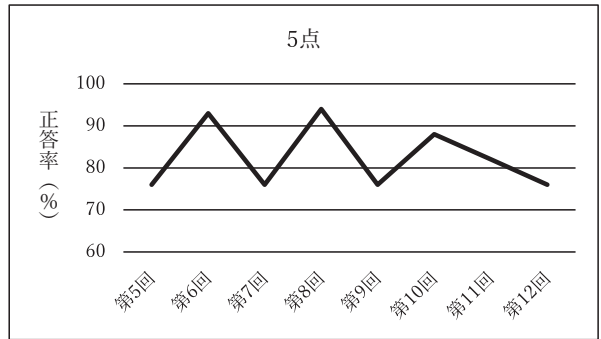


第1回の正答率は82%、第2回は94%、第3回は82%、第4回は88%であった。第1回はクイズ自体が初めてであったが、8割の正答率であった。第2回は9割以上と、一気に正答率が上がった。第1回は初めてのことで慣れないところもあったが、第2回では準備に少し手間取ったものの、「階名カード」を集中して読んでいた。この2回は5つの音をランダムに出題していたが、出題の音程は3度ほどであったために、正答率も高かっただろう。第3回は、正答率は82%と第1回と同率となった。これまでと異なり、1問目は $g^1$ 音、2問目は $c^1$ 音と5度離れた音を連続で出題してみた。前回までと同じくらいの時間をかけて実施したが、出題順を変えるだけで正答率に差が出た。児童も出題範囲は変わらないのに、なぜか難しいと悩んでいる瞬間もあった。第4回は前回の反省から、より集中して臨んでいた。4度の問題を出題したが、正答率は88%と上がり、前回よりも集中して望んだことがわかった。

②第5回～第12回（資料7）

出題範囲は「 $c^1$ 音～ $c^2$ 音」である。この期間のはじめの2回は、出題範囲が増えたため、より丁寧に時間を取って実施したが、前回までよりもクイズに慣れてきたため、第9回頃からは所要時間も短くなってきた。授業の挨拶が終わると、児童だけでクイズの準備をするようになった。またこの頃からリコーダーの学習も始まり、楽譜を読む経験がこれまでよりも増え、楽譜を読むことに対し、積極的な児童が増えた。

【資料7】第5回～第12回 正答率の変遷



第5回の正答率は76%、第6回は93%、第7回は76%、第8回は94%、第9回は76%、第10回は88%、第11回は82%、第12回は76%であった。出題範囲が広がった最初の回である第5回は、予想通り正答率は一気に下落した。7度の問題出題も下落した理由だろう。第6回は時間の限り集中して取り組んだ結果、正答率が上昇した。第7回はこれまでよりも少し時間を短くして7度の問題も出題したが、やはり正答率が下落してしまった。時間をかけ集中すると正答率は上がるが、少しでも時間を短くすると下落する傾向が見られるようになってきたため、楽譜を読むコツは、より速く正確に読むことが大切だという話をした。またこの時間、リコーダーの練習にも取り組み、楽譜を速く読むことですぐに演奏できると実感した児童が多かった。リコーダーの練習で使用した音は、 $g^1$ 音・ $a^1$ 音・ $h^1$ 音で、全てクイズの出題範囲であったことから、クイズの効果を実感している児童も多く見られた。第8回は前回の学習の成果もあり、正答率が一気に上昇した。6度の問題を出題したが、「階名カード」をしっかりとした目で見つめ解答していた。第9回は正答率が下落したが、この回から所要時間をさらに短くしたためだろう。授業時間を確保するため、大体4分以内で終わらせるよう心がけた。第10回は所要時間が短くなっている中、集中して88%の正答率を出すことができた。第11回は80%台ではあったが8度の問題を出題した中で、この正答率を出すことができた理由は、クイズを毎授業継続して実施していたからではないだろうか。第12回は当日にリコーダーのテストも実施したため、その緊張からか正答率が下がってしまった。

③第13回～第29回

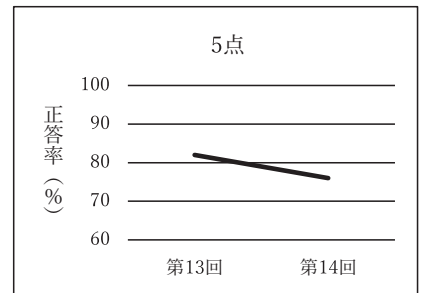
出題範囲は「 $c^1$ 音～ $d^2$ 音」である。回数が多いため、7月に実施した第13回と第14回を（1）、9月に実施した第15回から第20回を（2）、10月に実施した第21回から第24回を（3）、11月と12月に実施した第25回から第29回を（4）として記述する。



## (1) 第13回・第14回 (資料8)

第13回の正答率は82%、第14回は76%であった。第13回は出題範囲が広がったが、読譜への慣れもあり、集中力が普段より一段と高かった。リコーダーの練習を始めてからは、全員階名を教科書に書かずに、自ら読んで演奏していた。瞬時に読んだりリコーダーに慣れておらず演奏できなかつたりする児童は、リズム読みしたり、リコーダーの指練習とリズム読みを一緒にしたりして、楽譜に慣れていこうとする姿勢が多く見られた。第14回は1学期最後の授業で、気の緩みがあったのかもしれない。最後まで気を抜かずに取り組む大切さを、筆者自身が大きく感じた。

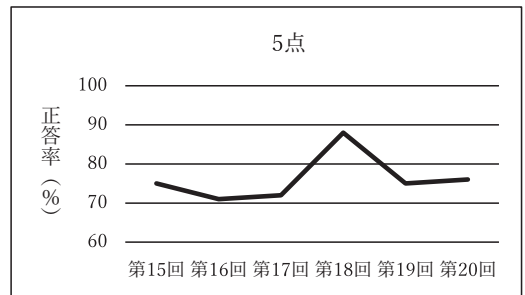
【資料8】第13回・第14回 正答率の変遷



## (2) 第15回～第20回 (資料9)

第15回の正答率は75%、第16回は71%、第17回は72%、第18回は88%、第19回は75%、第20回は76%であった。第15回は夏休み明け、最初の授業ということもあり、出題範囲は変わらず、解答時間を1学期の終わりよりも少し多くし、出題順も順次進行にしたにも関わらず、正答率がかなり下がってしまった。リコーダーの演奏方法も夏休みの間に忘れていた児童が多数いたため、復習を行なった。「1学期の内容を少しずつ思い出して、2学期の範囲を学習していこう」と伝えた。第16回は出題順をランダムにしたせ

【資料9】第15回～第20回 正答率の変遷



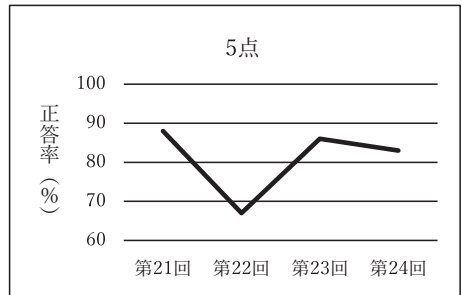
いか、さらに下がってしまった。児童の様子は落ち込むかと思ったが、「少しずつ」と前回授業で話したことを素直に受け止め、それほど落ち込んでいる児童はいないように感じた。授業で取り上げたリコーダーの作品も順次進行であり、 $g^1 \cdot a^1 \cdot h^1$ 音と3音しか使用しない作品だったことから、譜読みに時間をかけず練習していた。むしろこのころから、「楽譜に書いてある音が何かすぐにわかる」や「楽譜に書いてある音がわかればすぐに演奏できるから、お友達とも練習できる」と話す児童が増え、クイズを継続して続けることで身につく力について、児童が実感することが増えてきた。第17回の正答率は、前回とあまり変わらない72%であった。直前2回は1学期の復習も兼ねていたが、今回からは本格的に新しい範囲に入っていくと伝え、解答時間を少しだけ短くしたことも、正答率が上がっていない要因の1つだろう。リコーダーの練習を見ていると、多くの児童がきちんと演奏することができていた。このころから音高に合わせてハンドサインを取り入れて授業をした。リコーダーで演奏する前に、リコーダーのパート部分をハンドサインで歌いながら示したり、ハンドサインをつけて音階を歌ったりした。第18回は88%と正答率が上昇した。前回の正答率を受けて解答時間を長めに設けた。時間をかければ正答率が上がることを、再度実感した。正答率も上がっているため、喜ぶ児童もとても多かった。楽譜を読めるようになることは譜読みも早くなるし、歌を覚えることにも繋がるから非常に素晴らしいことだが、譜読みに時間をかけすぎると、演奏する時間が短くなってしまいうため、「楽譜を素早く読むことが大切だ」ということを伝えた。第19回は、75%とまたしても正答率が下がってしまった。解答時間は少し短くした。まだまだ楽譜を素早く読むことができていないと、児童自身で気づくことができていた。前回「楽譜を素早く読むことが大切だ」と伝えたが、「なぜ楽譜を読めるようになりたいのか」考えさせるところ、「自分たちだけで譜読みできるようになれば、音楽の授業以外でも練習ができる」ということに気がついた。そこで「素早く読むことも大切であるが、素早く正確に読むことで、初めて演奏することに繋がる」ということを伝えた。第20回は76%であった。前回の授業で素早く正確に読む大切さを伝えたため、解答時間は長くせずに取り組んだ。数字としての変化は大きく見

られないが、結果をすぐに求めず、継続していくことで結果が出てくるようになっていくと伝えた。実際多くの児童が楽譜を自分で読んで階名唱し、リコーダーの練習に生かすことができるようになってきた。この時期を全体的に見ると、夏休み明けで少しずつ学習に取り組んできたこともあるが、「運動会」の時期でもあり、児童はそれぞれ一生懸命取り組んでいたが、普段よりも疲れている頻度が高かったことも、ここ数回の正答率の低下の要因と考えられる。

(3) 第21回～第24回 (資料10)

第21回の正答率は88%、第22回は67%、第23回は86%、第24回は83%であった。第21回は88%と前回よりも10%以上も上昇した。「運動会」が終わった直後ということもあり、クラスの雰囲気は「より集中して学習しよう」となっていた。しかし、第22回は67%とかなり落ち込んだ。前回注力して取り組んだが祝日等で、1週間空いてしまった。少しの気の緩みで、正答率が大きく変わると実感した。リコーダーのレベルもこれから上がるため、今ここで頑張ることの大切さを伝えた。第23回は86%と前々回の正答率に近づいた。児童がそれぞれ積極的に取り組んでいることが結果に繋がった。単元の目標が、「旋律の動き」に着目していることもあり、リコーダーの練習をするときも、音の方向はどのようになっているか、旋律やフレーズの上がり下がりはどうになっているか等を意識する時間がさらに増えたことが、この結果を導き出したのではないだろうか。第24回は83%と若干下がってしまったが、大きな差ではないため、前回の結果が継続されていると考えられる。演奏と読譜の関連性について、理解が深まった期間だと思った。

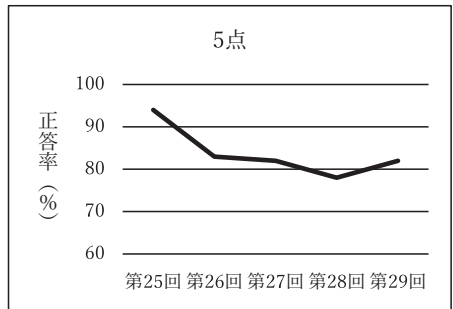
【資料10】 第21回～第24回 正答率の変遷



(4) 第25回～第29回 (資料11)

第25回の正答率は94%、第26回は83%、第27回は82%、第28回は78%、第29回は82%であった。第25回は94%と、この出題範囲においては最高の正答率となった。週2回の授業がしっかり実施でき、毎授業各自が楽譜を読みながら、リコーダーの練習に励んでいたことが、今回の結果の要因ではないかと考える。またリコーダーの練習時に、階名唱にも取り組んでいる児童も多く、これまで継続してきたことが正答率に現れた結果ではないだろうか。そしてこの期間には、後述する「階名クイズスペシャル」も実施した。第26回は、正答率が下がってしまった。「展覧会」の開催が要因だろう。しかし、「運動会」のときほど落ち込みは低下しなかったため、これも継続してきている効果であると考えられる。第27回は、テストのためなかなか実施できず、期間が空いてしまったが、正答率はさほど変わらなかった。クイズはできなかったが、毎授業、歌やリコーダーの練習の際に、楽譜を常に自分で読んでいたからであろう。第28回はテスト終了後ということもあり、油断していたのかもしれない。行事の後の気の緩みが正答率に大きく関わってしまったことが、筆者の反省点である。最終回である第29回は、学期末の授業ということもあり、注意力が散漫しているように見えたが、卒業式の練習に入ることもあり、改めて集中させた。クイズの前に、「卒業式に向けて、今まで以上にたくさん曲に取り組むことになるから、これまで勉強してきたことを発揮できるね」と伝えたところ、緊張感をもってクイズに取り組んだ。一言伝えるだけで正答率が変動するため、行事の前後や児童が不覚を取りそうなタイミングで、一言伝えながら実施したら良かったと、最終回にして気がついた。

【資料11】 第25回～第29回 正答率の変遷



## 4-6. 「階名クイズスペシャル」(資料12・13)

これを実施したきっかけは、ある作品のリコーダーの練習中に、児童から「楽譜を自分で読むことができ練習もできるけど、休み時間に練習したり、家で自習したりする際に、階名が書かれたものがあると、1人でも学習しやすい」という意見があったことである。教科書に書いてしまっただけでは読譜の練習の意味がないと思い、何かできないか検討していたところ、これを考えた。実施日は、10月26日と10月30日である。この時期は「運動会」が終わり気温も落ち着き、「展覧会」まではまだ時間があつたため、授業実施が週2回定期的にできていた。第23回から第24回の実施日程に若干の空きがあるのは、このためであった。毎授業クイズを実施してきたが、継続していくことの結果が少しでも出れば、児童のやる気もさらに向上するのではないかと考え、実作品を使用したクイズの実施に至った。使用した作品は、「山のポルカ」の「イ」の部分(資料15)である。この作品は「ア」「イ」「ア」の三部形式であり、このクイズを実施したときは、リコーダーで「ア」の部分を実習していた。「イ」は2つのパートに分かれており、この部分を各パートに分けて問題を作成した。スペシャル①に上のパート(資料12)、スペシャル②に下のパート(資料13)を出題した。そのため児童にとっては、初見の楽譜である。予告していなかったため、児童は通常通りクイズの準備をしていた。「今日はいつもとは少し違うクイズです。」と伝えると、児童のテンションは大きく上がり、やる気も上がった。解答用紙を配布すると、いつもと異なり楽譜になっていたことから、「ついに楽譜だ。楽譜を読むんだ。」と話す児童がいた。

この時期は、1回の実施を3分程度としていたが、スペシャルでは10分程度かけて実施した。解答時間を5分間しっかり取り、その後板書も使用した解説も実施したため、その程度の時間を要した。それぞれのクイズの後、解答を見ながら階名唱し、リコーダーでも演奏した。スペシャル②の実施後に、実作品であること、これから取り組む作品であることを伝えると、児童はクイズをやることで、リコーダーの練習にも繋がると気づいた。また自習で使用できると気づく児童もおり、これまで以上に意欲の向上に繋がったように感じた。

## 5. 実作品を使用した教育実践

## 5-1. 「ふじ山」(資料14)

この作品は文部省唱歌、巖谷小波作詞である。

歌詞はもともと国語の教材として『尋常小学読本』に載っていた。これに旋律が付けられ、明治43年「ふじの山」という曲名で『尋常小学読本唱歌』に掲載され歌われ、子供たちに親しまれるようになった。いったん教科書から姿を消したが、昭和52年から再び歌唱共通教材曲として取り上げられるようになった。<sup>(12)</sup>

いきなり楽譜を読ませず、範唱を通して音取りを実施した。強弱等表現については指導せず、一通り歌えるようになってから、楽譜を提示し階名唱を実施した。階名唱のあと楽譜を見ながら、強弱やフレーズについて考えさせた。強弱を考えていると、音高に合わせて強弱をつけることができることに気がついた。音が高くなれば強弱が強くなり、低くなれば弱くなるのではないかと、という意見が出た。検証のため、音高に合わせて強弱を変えて歌ってみた。①音が高くなるにつれてクレッシェンドし低くなるにつれてデクレッシェンドする演奏と、②反対に音が高くなるにつれてデクレッシェンド、低くなるにつれてクレッシェンドする演奏を実施した。階名唱で

【資料12】階名クイズスペシャル①

【資料13】階名クイズスペシャル②



まず演奏し、その後歌詞で演奏した。検証の結果、①の方が違和感のない良い表現になることに気がついた。次にフレーズについて考えた。1フレーズは4小節からなっており、そのフレーズが4つで1節ができていたことがわかった。第9小節から第16小節は2つのフレーズからなるが、それを1つの大きなフレーズと捉えることもできる。第9小節から第12小節を前半、第13小節から第16小節を後半とすると、前半は3小節間かけて順次進行で1オクターブの上行をする。そして後半は4小節間かけて1オクターブの下行をする。とくに第12小節1拍目で付点二分音符をのびした後、第13小節1拍目にこの作品における最高音であるc<sup>2</sup>音がくる。音高に着目して楽譜を読んだところ、この上行・下行の様子は山を指しているように気がつき、その山とは富士山なのではないか、という結論になった。1番も2番も第13小節から第16小節の歌詞は、「ふじは日本一の山」(参照資料2)であり富士山の壮大さを表している箇所、詩においても最も盛り上がる部分であり、一番伝えたいことだということが言えるだろう。この箇所について再度、先ほどの検証結果をもとに強弱を考えてみたところ、前半を音の方向が上行のためクレッシェンド、後半を下行のためデクレッシェンドになることを確認した。さらに音の方向に合わせハンドサインを使用して演奏したところ、まるで山を描いているように感じる児童が多くいた。とくに2人組で1人はハンドサインなしで歌う、もう1人はハンドサインを使用しながら歌うことで音の方向を視覚化でき、より理解度が深まった。他にも音高に合わせて、低いときは体をかがめ、高い時は背伸びをする等、体を動かすことでも視覚化することができた。はじめは1音1音丁寧に読むところから始めたが、最終的には児童だけで音楽表現を考えるところまで、授業を進めることができた。

【資料14】「ふじ山<sup>(13)</sup>」

5-2. 「山のボルカ」(資料15)

チェコ民謡。教材のため、リコーダーで演奏できるように、またイの部分

【資料15】「山のボルカ<sup>(14)</sup>」

の部分は二部合奏に編曲されている。この作品のアの部分

イの部分は二重奏になっていることもあり、読みにくい児童も多数いたため、楽譜を読むための工夫をする必要があった。そこで前述した

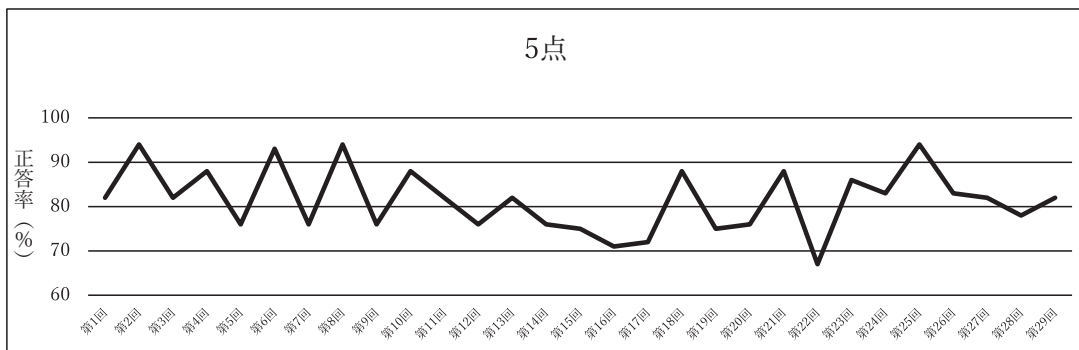
「階名クイズスペシャル」を実施した。楽譜を読む楽しさ、達成感、読めることへの成功体験の経験と、自主学習のための試みであったが、毎授業必ず実施する「クイズ」としてではなく、実用的に読むための一歩として、実作品を使用した「スペシャル」を実施したことで、児童の意欲もかなり向上した。

楽器の演奏だからといって、すぐに楽器を持たず、まず楽譜をよく読み階名で歌えるようになった後、楽器なしで運指を確認した上で、楽器を用いて練習をする、という流れも習慣づけることができた。またこの流れを習慣づかせて以降、譜読みの時間も大幅に削減でき、音色や細かいリズム・タンギング等、音楽表現をより深く学習することができた。また聴く時間を多くもつことで、友達の演奏から学ぶことも多かったようだ。そして教科書には一切「音のメモ」を書かせず、練習時にわからなくなったり復習したりするときは、スペシャルの解答を参照するよう徹底させた。練習も含め楽器の演奏時は、「音のメモ」が書かれていない楽譜を見て練習させることで、楽譜と向き合う時間をしっかり確保した。

## 6. まとめ

クイズを5月から12月までの期間、夏休みを除く約半年間実施して読譜を継続的に行なうことで、楽譜を読む能力は向上させることができるとわかった。夏休みにとくに課題を出していなかったこともあり、夏休み明けは正答率が下がってしまうことが予想されていたが、予想以上に低かった。また「運動会」の前後は、どうしても児童の気持ちも学校の雰囲気も「運動会」一色になってしまうため、正答率は下がってしまった。しかし、継続的に毎授業実施できたことで、全体的な正答率は向上したと考える。割合としては、大きな変化は見られないところもあるが、出題範囲の拡大と所要時間の短縮を加味すれば、向上していると言えるだろう（資料16）。

【資料16】「階名クイズ」正答率の変遷



児童の授業中の反応を見ていてもクイズを始める前は、新しい作品を学習するときに「どんな曲かな？楽しいかな？難しいかな？」という反応が多かったが、7月頃には、「まず自分で楽譜を読んでみる」「一度リコーダーの練習をしてみる」と自ら初見演奏に取り組む児童が半数ほどになっていた。はじめは時間をかけてしっかり読んでいた。10月中旬頃からは、読譜のスピードも上がり、譜読みの時間を短縮することに成功した。ほとんどの児童が1時間（45分）のうちにさらうことができるようになった。またその時間にさらいきれなかった児童も、中休みや昼休みに音楽室に自ら練習に来たり、自宅にリコーダーを持ち帰って練習したりして、次の授業までには通して演奏できるようになっていた。したがって楽譜を自分で読めるようになることは、授業意欲の向上にも繋がると判明した。また譜読みの時間が1時間で終わる分、次の授業からは強弱だったりフレーズだったり、表現の学習に入ることができたため技術力の向上にも繋がった。音の方向性から音楽の盛り上がり方・頂点・強弱・タンギングや息の使い方まで、授業内で指導することができた。スペシャルで実作品を扱ったことで、継続

して続けることの大切さに気づいた児童が多かった。音の高低から作品の雰囲気を想像し、表現に取り入れるためにどのようにしたら良いか、自ら考えて練習できるようにもなり、読譜を毎授業することによって得られる力は、読譜の能力だけではないということがわかった。18名の児童のうち、14名はピアノ等音楽を学校外では習っていないが、学校の音楽の授業のみで、読譜力を養うことは可能であることがわかった。

本研究ノートでは、3年生のための「読譜教育」に焦点をあて実践結果と考察を述べた。約半年間に渡り、クイズの実践の結果、教育の効果があることは認められたが、少人数だったこともあり、多人数になると結果が異なることもあるだろう。今後の課題としては、多人数クラスや同学年複数のクラスでの実施と研究である。同じ課題でも児童の数に応じて課題への取り組み方、感じ方は多様である。また読譜力を演奏に生かすための教育実践研究にもさらに取り組み、フォルマシオン・ミュージカルのための授業実践の提案を提示していきたい。

### 謝辞

本研究ノートの執筆にあたり、久保田慶一先生にご教示を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

### 註

- (1) 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』 東京：東洋館出版社 2018年
- (2) 同書、p. 61、p. 68
- (3) 同書、p. 61
- (4) ジャン・ピアジェ Jean Piaget (1896-1980) スイスの心理学者。プラスキ、M. A. 『ピアジェ理論の理解のために』 日金子太郎（監） 和久明生（訳） 東京：同文書院 1986年 p. 6、p. 12、p. 246
- (5) 古川聡他 『教育心理学をきわめる10のチカラ』 東京：福村出版 2012年 p. 19
- (6) 前掲『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』 p. 167
- (7) 小原光一他 小学校音楽教科書『小学生の音楽3』 東京：教育芸術社 2015年 p. 8  
「ドレミで歌おう」の歌詞については、教育芸術社の許諾を得て使用している。
- (8) 同書、pp. 14-15
- (9) 同書、p. 19
- (10) 同書、pp. 36-37
- (11) 同書、pp. 34-35  
「山のポルカ」の編曲については、教育芸術社の許諾を得て使用している。
- (12) 小原光一他 小学校音楽教科書『小学生の音楽3 指導書研究編』 東京：教育芸術社 2015年 p. 60
- (13) 註 (10) を参照
- (14) 註 (11) を参照

### 参考文献

- 石原慎司 「小学校音楽科の学習事項の配列に関する教育工学上の課題 -教科書に掲載された初出時期の比較から-」  
『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第39号 2017年 pp. 59-68
- 小原光一他 小学校音楽教科書『小学生の音楽3』 東京：教育芸術社 2015年
- 木村章子 「小学校音楽科の読譜指導 -児童の読譜力の実態調査及び授業実践の提案」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』第19号 2016年 pp. 15-28
- 玉護眞理子 「図形認識を利用したソルフェージュの提案 -音高の認識を中心に-」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第20号 2019年 pp. 103-117

ブラスキ, M. A. 『ピアジェ理論の理解のために』日名子太郎 (監) 和久明生 (訳) 東京: 同文書院 1986年 p. 6、p. 12、p. 246

古川聡他 『教育心理学をきわめる10のチカラ』 東京: 福村出版 2012年 p. 19

文部科学省 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説音楽編』 東京: 東洋館出版社 2018年 p. 61、p. 68

吉富功修・三村真弓 「小学校音楽科の学力に関する研究 (1) - 音符、休符、記号等の理解を中心として -」『環太平洋大学研究紀要』第2号 2009年 pp. 85-94

吉富功修・三村真弓 「小学校音楽科の学力に関する研究 (2) - 音符、休符、記号等の理解 -」『環太平洋大学研究紀要』第3号 2010年 pp. 25-32

【参照資料1】「階名クイズ」解答

	①	②	③	④	⑤
第1回	ミ	ソ	レ	ド	ファ
第2回	レ	ミ	ド	ファ	ソ
第3回	ソ	ド	ファ	レ	ミ
第4回	ファ	ド	ミ	レ	ソ
第5回	ラ	レ	ド	ミ	シ
第6回	シ	ファ	ラ	ソ	ド
第7回	ド	ソ	ラ	ド	レ
第8回	ド	ミ	ファ	ソ	シ
第9回	ド	シ	ソ	レ	ラ
第10回	ド	ソ	ミ	ド	ラ
第11回	ソ	ド	ド	ファ	シ
第12回	ファ	レ	ラ	ミ	ソ
第13回	レ	ド	ソ	シ	ファ
第14回	ド	ミ	レ	ド	ソ

	①	②	③	④	⑤
第15回	ソ	ラ	シ	ド	レ
第16回	ラ	レ	シ	ソ	ド
第17回	レ	ソ	ド	シ	ラ
第18回	ド	シ	ソ	レ	ラ
第19回	シ	ファ	ド	ミ	ソ
第20回	ミ	ド	ラ	レ	ソ
第21回	ファ	ド	ソ	シ	ラ
第22回	ミ	シ	ファ	ド	ソ
第23回	ソ	シ	ラ	ド	ファ
第24回	シ	ファ	ド	ソ	レ
第25回	ファ	ド	ラ	ソ	ミ
第26回	ソ	レ	ミ	シ	ラ
第27回	ファ	レ	ド	ラ	レ
第28回	レ	ファ	ド	ソ	ラ
第29回	ド	レ	ド	レ	ファ

【参照資料2】「ふじ山」の歌詞

ふじ山	
1. 頭を雲の 上に出し	2. 青空高く そびえ立ち
四方の山を 見下ろして	体に雪の きものきて
かみなりさまを 下に聞く	かすみのすそを 遠くひく
ふじは 日本一の山	ふじは 日本一の山
出典: 教育芸術社『小学生の音楽3』pp. 36-37	
(平成26年3月検定済)	